2025年3月25日

2024年度自己点検・評価に関する総括

教学改革推進会議
委員長 赤楚 治之

教学改革推進会議では、各学部学科、大学院各研究科専攻及び各教学部門(以下「各組織」)が作成した2024年度の諸活動に係る自己点検・評価報告書(2024年度点検・評価シート及び各組織からの総括)に基づき、全学的視点で総括を行いました。

名古屋学院大学自己点検・評価規程第3条に規定された項目について、本学の各種方針(※)に基づき、2024年度における各組織の諸活動を評価することに加え、「2024年度重点実施項目(最重要項目)<改善項目>」に設定した項目の達成度についてもあわせて確認いたしました。特に、<最重要項目>の一つに挙げた「学修者本位の教育の実現に向け、内部質保証のPDCAサイクルを適切に回すことができるよう取り組む。2024年度目標に設定した項目を実施する趣旨や目的を各組織の構成員が共有し、進捗状況を把握し、明らかとなった課題・問題点については2025年度に向け改善策を策定する。点検・評価を行う際、その客観的数量データとして、アセスメント・ポリシーに基づく教学IRデータを積極的に活用する。」に関しては、重点的に評価を行いました。

そのうえで、2024年度における教学組織の活動において誇るべき項目(NGU PRIDE 2024)、2025年度に教学改革推進会議が特に注視したい事項(着目項目)、及び改善を求める項目(改善項目)を策定いたしました。着目項目及び改善項目については、2025年度に適宜進捗状況を確認するとともに、改善・改革を行うための支援・指示等を行うこととします。

教学改革推進会議では、2023年度より実質的な点検評価の実施を掲げ、その重要性を繰り返し説明してきました。2024年度点検評価においては、点検評価の実質化が学部教育の改善及び教育の質保証につながることへの理解が進み、各組織において丁寧な点検評価が進んだと実感しています。設定した目標に対して真摯に取り組む、構成員との情報共有や議論が活発に行われている組織については、おのずと構成員との一体感が生まれていることが点検評価結果からも読み取れ、特に学部においては、その半数以上において実質的なPDCAサイクルが確立しています。2025年度は、各組織におけるPDCAサイクルの定着と、学部長等を中心としたマネジメント体制の更なる推進が期待されます。

また、2024年度は、内部質保証体制の適切性に係る点検評価として、教学改革推進会議を中心とした内部質保証に係る取組の適切性について点検・評価を実施し、本学の内部質保証に関する基本方針と手続きに則り、適切に実施していることを確認しました。また、学長の下に設置する点検チームを規程に明文化し、点検チームが、教学改革推進会議が各組織の自己点検・評価を行う際の総括(案)などを作成するなど、効果的な運用がなされていることも確認しています。

2025年度においても、教学改革推進会議は、教学の内部質保証を推進する会議体として、課せられている役割を果たしていきたいと考えています。

(※)名古屋学院大学内部質保証の基本方針及び手続、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー、アセスメント・ポリシー、大学として求める教員像、教員組織の編制方針、学生支援に関する方針、教育研究等環境の整備に関する方針、研究に対する基本的な考え、社会連携・社会貢献に関する方針、国際交流に関する方針、大学運営・財務に関する方針、遠隔授業(オンライン授業)に関する方針

【2024年度自己点検・評価 結果】

①誇るべき項目〈NGU PRIDE 2024〉（詳細は別紙）

- ・昨年度に比べ、すべての組織において、実質的な点検評価がなされています。
- ・特に学部においては、その半数以上において適切な PDCA サイクルが回っています。学部独自の取り組みが進み、一部学部においては、学部長を中心とした学部マネジメント体制の構築が進められています。
- ・学生の DP に対する理解を深めるため、学生への説明機会の創出や、各種ツールの充実等を進めています。

②2025年度に特に注視したい項目〈着目項目〉（詳細は別紙）

- ・学修者本位の教育に向けた学習成果の可視化について、改めて学部構成員と共有することとします。
- ・NGU クロス等を活用した学部教育の特色・取組のタイムリーな外部発信を強化します。（2024年度より継続）
- ・昨年度の状況確認を踏まえ、学部としての「書く力」養成の今後の方向・対策について明らかにします。
- ・PCDA を適切に回し、改善につなげることで、また、学修者本位の教育の達成に向け、その PDCA サイクルを定着させるため、学部マネジメント体制の更なる推進を期待します。

③2025年度に改善を求める項目〈改善項目〉（詳細は別紙）

- ・学習成果の可視化への対策を実行し、実質的なものにする。こととします。（商学部、外国語学部）
- ・離籍率について、改善計画を実施し、3%以下を目指す。こととします。（外国語学部、学生部）

経済学科	<p>学部教育運営に係る各種活動において、改革・改善の PDCA サイクルが回っている。</p> <p>学部教育の推進においては、他学部に見ない形で ICT 教育の充実が図られている。複数年次における外部テスト実施や、4年生全員出席の卒業研究発表会を行うなど、学生の成長実感を高め、学習成果を可視化する取組も確実に進んでいる。</p>
現代社会学科	<p>学部教育運営に係る各種活動において、改革・改善の PDCA サイクルが回っている。</p> <p>「現代社会学部教学マネジメント委員会」の設置・運用を開始し、学部マネジメント力が向上している。2024 年度に計画した取組はそのほとんどが計画どおり実施され、学習成果の可視化や、学修者本位の教育への取組が進化している。〈学びの拠点 oasiS〉の効果的活用について学生を交えた検討を行っていることも学部独自の取組である。また、学部 FD 活動を積極的に進めることで学部構成員の情報共有が進み、学部に一体感が生まれている。</p>
商学科 経営情報学科	<p>学部教育運営に係る各種活動を、しっかりとチェックし改善につなげようとしている。</p> <p>2024 年度に計画した取組について「実施できたこと」と「実施できていないこと」を把握し、2025 年度に向けた改善を進めようとしている。また、新カリキュラムにおいて設定した 1 年次秋学期の専門演習入門において、1 年生が 2 年次演習を円滑に履修できる体制を整えた。</p>
データ経営学科	<p>学部開設 1 年目であるが、学部教育運営に係る各種活動において、改革・改善の PDCA サイクルが回っている。</p> <p>2024 年度に計画した取組が計画どおり実施されている。学びの可視化ツールである「学びの軌跡 NOTE」の活用結果をすぐに分析し、学部構成員での情報共有が迅速に行われている。また、クラスアドバイザーの複数人体制、第三者によるシラバスチェック、DP と科目との関連についての学生アンケート実施、授業外実習の効果的運用等、学部独自の活動も積極的に進めている。</p>
法学科	<p>2022 年度から運用を開始したラーニングポートフォリオを軸として、学部教育に係る PDCA を回し、学生の学習成果の評価を継続的に進めている。</p> <p>学生のラーニングポートフォリオ入力率が 90% 以上と非常に高く、一部の学生ではなく全学生の学習成果の把握ができる体制を整えている。また新たに「教員と学生との意見交換会」を実施し、学生の意見を取り入れた学部教育の改善を図ろうとしている。</p>
英米語学科	<p>昨年度までの記述に比べ、抽象的な記述が減り具体的な記述が中心となり、実質的な点検評価実施に向けた改善が図られている。</p> <p>新カリキュラムにおいて導入した企業連携プログラムにおいて、学生の今後のキャリアに向けた視点での教育を進めた。学部 FD 活動も積極的に実施している。また、2025 年度からは新たにポートフォリオを導入することを決定した。</p>
国際文化学科	<p>学部教育運営に係る各種活動において、改革・改善の PDCA サイクルが回っている。</p> <p>学部における各種取組に係る教員の小グループを構成し、目標・取組が計画的に進んでいる。学生と教員の交流の活性化、卒業生との交流や企業訪問を通じたキャリア教育、グローバルリンクスの有効活用、大学祭での学生の発表機会創出を通じた大学行事の活性化など、さまざまな取組を積極的に実施できているのも、学部マネジメント体制が確立しているからこそである。</p>
スポーツ健康学科 こどもスポーツ 教育学科	<p>学部教育運営における各種活動において重要とされる内容について問題意識を持ち、委員会を立ち上げて組織的な取組を行おうとしている。</p> <p>コロキウムにより、FD、研究発表、社会連携に関する説明会を実施し、学部内での情報共有が図られ、学部の一体感が増している。また、2024 年度入学生より学修ポートフォリオを導入し学習成果の把握に努めた。4 年生の卒業研究発表会に 3 年次生を参加させるなど、学生の学習へのモチベーションを高める工夫も進んでいる。</p>
理学療法学科	<p>学部教育運営に係る各種活動において、改革・改善の PDCA サイクルが回っている。</p> <p>今年度に掲げた目標(取組)をすべて実施できている。他学部に先んじて「学部教員と学生との交流会」を継続的に実施し学部教育の改善に努めている。全教員が全学生の卒業研究を評価し、学生へのアンケートを実施すること、1・2年次生全員とゼミ教員との面談実施に加え、3・4年次生にも全学生と面談を行うこと、学修ルーブリックの評価結果を学位授与に反映させる仕組みを進めること等、毎年度目標設定が高度化されており、学修者本位の教育に向けて進んだ取り組みができています。</p>

経済学専攻 経営政策専攻 英語学専攻 国際文化協力専攻	少人数教育として学生に対し丁寧な指導を進める中で、大学院教育に係る活動を進めている。学生の履修とDPとの関係をチェックするなど、学習成果の評価を継続的に行おうとしている。
宗教部	チャペルアワーや宗教講演会等を計画的に実施し、建学の精神浸透のための取組を継続している。
教務部	2024 年度に開設した経営学部の授業計画や副専攻プログラムに関する業務について円滑に遂行し、また、〈最重要項目〉〈改善項目〉への対応を進めた。
学生部	「学生支援に関する方針」を踏まえた諸活動及び点検・評価を実施している。大学が求められている「学生支援」の在り方について常に情報収集を行い、本学の体制整備に努め、多岐にわたる業務を着実に遂行している。2023 年度点検評価において常任理事会等から出された離籍者数に係る意見への対応として、初年次生へのサポート体制を強化した。
キャリアセンター	各学部とキャリアセンターが連携し、4 年生就職活動の状況把握を徹底し、他大学と比較しても高い就職内定率を得ている。また、早期化している就職環境を踏まえ、低年次生へのアプローチを進めた。
入学センター	経営学部特設ページ開設等において 2 年目の広報を確実に展開した。また、その他の学部(商学部・外国語学部)の特色リーフレットの作成、LINE 登録への促進、本学施設の紹介動画作成などさまざまな施策により、オープンキャンパス来場者数を増加させた。2025 年度入試においても入学定員確保が可能な状態にある。
国際センター	「国際交流に関する方針」を踏まえた諸活動及び点検・評価を実施している。学生主体での活動がうまく進んでいる。異文化理解のプログラムにおいては、特に国際文化学部の学生とのつながりを深めている。また、留学派遣においても滞りなく実施できている。留学生別科学務委員会の設置により事務運営等がうまく進む体制が整いつつある。
学術情報センター	「教育研究等環境の整備に関する方針」を踏まえた諸活動及び点検・評価を実施している。第 13 期情報処理システム稼働に向け問題なく作業を進めている。また、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」(リテラシーレベル)について、無事に認定を受けることができた。
総合研究所	研究機関に求められる安全保障輸出管理の体制整備として、安全保障輸出管理規程を新たに制定した。2023 年度点検評価において常任理事会等から出された教員の業績に係る意見への対応として、学長と問題を共有し次年度以降の方向性を決定した。
教職センター	「学生支援に関する方針」を踏まえた諸活動及び点検・評価を実施している。教職課程担当教員が教職課程の理念や目的を共有し同じ認識を持って教育にあたっている。卒業生による講演会、学部主催あるいは特任教授による勉強会、採用試験合格者報告会など、教職を目指す学生が意欲的に学べる環境を整えている。
社会連携センター	「社会連携・社会貢献に関する方針」を踏まえた諸活動及び点検・評価を実施している。特に高大連携教育を積極的に進め、美和高校との協定の締結、その他の高校における探究授業の実施を促進している。まちづくり、学生ボランティア活動、地域貢献、行政との連携など、多岐にわたる業務を滞りなく進めている。
大学院事務室	ペーパーレス会議の導入やサイボウズ審議の積極的活用、また入試要項の web 化など、業務見直しによる効率化及び教職員の業務負担削減を図った。また、経営政策専攻(博士後期課程)のカリキュラム改訂のサポートを行った。
学長室	教学の質保証に関し、教学改革推進会議の所管部署として、「名古屋学院大学内部質保証の基本方針及び手続」を踏まえ業務を遂行している。

2025年度 着目項目

*教学改革推進会議が特に注視したい事項

全学部学科	学修者本位の教育に向けた学習成果の可視化について、改めて学部構成員と共有する。
全学部学科	NGU CROSS を活用し、学部の各種活動を学内に発信するとともに、入試広報につなげる。
全学部学科	昨年度の状況確認を踏まえ、学部としての「書く力」養成の今後の方向・対策について明らかにする。(例:2 年次演習において学部統一課題を課す、ポートフォリオに書く力養成の要素を取り入れる、次期カリキュラム計画時に、学部として書く力養成科目群を指定する、等)
経済学科	学修者本位の教育に達成に向け、適切に回っている PDCA サイクルを定着させるため、学部マネジメント体制の更なる推進を期待したい。 なお、先進的に取り組まれている ICT を活用した教育手法については、その効果等も含め全学に共有願いたい。
現代社会学科	学修者本位の教育に達成に向け、適切に回っている PDCA サイクルを定着させるため、学部マネジメント体制の更なる推進を期待したい。 なお、活発に行われている学部 FD 活動については、全学 FD 委員会へ随時報告し、学部で行われた FD の効果を全学にもぜひ浸透願いたい。
商学科 経営情報学科	学部教育における各種活動の PDCA を適切に回し、改善につなげる。 なお、学習成果の評価ツール「学びの軌跡ノート」については、実施効果等を含めて、冊子または web 化の議論を進めてほしい。
データ経営学科	学修者本位の教育に達成に向け、適切に回っている PDCA サイクルを定着させるため、学部マネジメント体制の更なる推進を期待したい。 なお、2025 年度は学部開設 2 年目となるため、2 学年の学生の学習状況や学生生活の状況を把握願いたい。
法学科	学部教育における各種活動の PDCA を適切に回し、改善につなげる。 なお、当該学科が活用しているラーニングポートフォリオについて、2025 年度末には 4 学年の入力が完了するため、詳細な分析実施について準備願いたい。
英米語学科	学部教育における各種活動の PDCA を適切に回し、改善につなげる。 なお、2024 年度に導入した新カリキュラムと、正課以外の各種活動との関連等について、学科会議での FD を通じてさらに検討願いたい。
国際文化学科	学修者本位の教育に達成に向け、適切に回っている PDCA サイクルを定着させるため、学部マネジメント体制の更なる推進を期待したい。
スポーツ健康学科 子どもスポーツ 教育学科	PDCA を適切に回すために、学部マネジメント体制を構築する。 なお、各種活動において設置された委員会については、実質的な運用が図られたい。
理学療法学科	学修者本位の教育に達成に向け、適切に回っている PDCA サイクルをさらに定着させるため、学部マネジメント体制を強化する。
経済学専攻 経営政策専攻 英語学専攻 国際文化協力専攻	大学院教育における各種活動の PDCA を適切に回し、改善につなげる。 なお、目標(実施する取組)について構成員との共有を図り、実質的な PDCA を回すことを念頭に各種活動の実施をお願いしたい。

2025年度 改善項目

*改善を求める事項

商学科 経営情報学科	学習成果の可視化への対策を実行し、実質的なものにする。
英米語学科	学習成果の可視化への対策を実行し、実質的なものにする。 離籍率について、昨年度に引き続き芳しくない状況が続いているため、改善計画を実施し、離籍率 3% 以下を目指す。
学生部	離籍率が芳しくない学科については、改善計画を実施し、3% 以下を目指す。